

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2022年2月 NO.224



[もくじ]

- 2～3 オオグソクムシをご存じですか…松尾拓哉
- 4～5 本に顔をうずめるあなたが見たい…山中由貴
- 6～7 グラデーションの旅の途中…由井 恵
- 8～9 私の仕事 花火師…安岡沙都
- 10 かるぽーとマラソン部の足跡…濱口拓也
- 11 「アンテナ」いきいきセカンド☆ライブ講座…下尾 仁
- 12～13 高知市文化振興事業団12～1月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「木蓮」 高田琴音

公益財団法人高知市文化振興事業団

オオブリックムシをいじりますが

松尾 拓哉

オオブリックムシは、私の仕事の相棒であり深海を代表する人気の深海生物です。

私は、室戸市で深海生物を獲る漁師をしている松尾拓哉です。大阪出身。幼い頃から室戸の海、漁師に魅せられ、室戸で漁師になり「漁師の水族館」を作るという夢を持ち、室戸市佐喜浜町に移住しました。

幼い頃から生物を飼育するのが好きで自宅で様々な生き物を飼育し、フィールドに行くのが大好きな子どもでした。室戸市には小学三年生の時から縁があり、学校が長期休みになると電車とバスを乗り継ぎ、大阪から一人で佐喜浜町まで行き、知り合いの民宿の手伝いをしてお世話になりながら、定置網で採れた漁師さんのいらぬ魚を譲ってもらったり、自分でも海に潜って魚を採取していました。港で水槽を借りて集めた魚を蓄養

し、休みが終わりに近づくと親の車にタンクを積んで迎えに来てもらい大阪で餌付け飼育するといったことをしていました。

子どもの頃、魚の種類が多いこと、食べたらいっぱい魚が多いこと、珍しい生物、特に深海の生物がたくさん生息していることに気がきました。どうして室戸でいろいろな種類の生物を見ることができるのか調べると、室戸はユネスコ世界ジオパークにも認定されている地形で、陸から深海がすぐ近く、海洋深層水があり、沖には黒潮が流れるという素晴らしい環境であること、また、その環境を利用した定置網などの様々な漁業がある地域だ、ということを知りました。

そして、その頃、室戸に住んで漁師になりたい、魚を獲って室戸の地域の事を紹介したい、深海が陸から近い室戸ならではの深海生

物を中心に紹介する水族館を作りたいと決意をしました。

大阪の専門学校で海洋生物を学びました。卒業後は、室戸で採れる深海生物と外洋を泳ぐ生物を多く飼育している茨城県のアクアワールド茨城県大洗水族館に、水族館の勉強をするために就職しました。次に室戸の隣の徳島県で採れる魚を調べたいと思い、徳島県の小さな水族館を運営する和歌山県の水族館に転職し、和歌山と徳島を行き来しながら水族館を作るための技術を学びました。

二十五歳になった二〇一六年、幼い頃からの夢を実行に移します。

漁業研修制度を利用して室戸市に妻子と移住し、子どもの頃からお世話になっていた師匠の船でキンメダイやアカムツなどを狙う漁業の技術やホエールウォッチングの仕事を学びました。そして、二〇一九年五月、ようやく地域の方

々や関係機関の方々に支えていただき、夢のスタートとなる「海来」と名付けた自分の船の進水式を行うことができました。先輩漁師さんや地域の方々が私の夢を応援してくださり、今は漁師として、水族館を作る夢を目標に変えて様々なことに挑戦しています。

室戸の海は自然豊かで生物が多様です。おいしい魚はもちろんですが、図鑑でしか見たことのない珍しい生き物たちも暮らしています。そんな中で私が狙うのはこれまで獲れても値が付かなかった深海生物です。



海来

深海の研究は未知な領域が多く、研究者にとっては貴重な資料だったりします。そこで水族館勤務時代の経験と人脈を活かし、展示研究用として深海生物などの販売を始めました。室戸の海は研究もほとんどされていない海域で、様々な海洋研究者が注目しており、実際、全国各地の水族館と共同で、スタッフ、研究者が「海来」に乗船し深海の調査を行っています。

「海来」には他の船にはない深海生物を生きたまま安定的に陸に持ち帰る設備があり、漁の仕方も他の漁師さんとは少し違います。深海から船に仕掛けを上げてくるスピードや仕掛けの数など、先輩漁師さんや研究者の方々の指導を



体験漁

受けて深海から上げてくる生き物たちにできるだけ負荷のかからない漁を行い大切な命が無駄にならないように工夫をしています。

また、漁場から港が近く、なんといっても深海生物が暮らす海の水「室戸海洋深層水」が汲み上げられています。海洋深層水は年間を通して冷たく綺麗な海水で、室戸での深海生物の飼育、調査、研究にとっても重要です。採集した深海生物たちは、傷や病気の有無を調べ餌付けなどを行い、万全の状態で研究施設、水族館にお嫁に行きます。その際に深海に近い環境で飼育できる海洋深層水が役立ちます。

私が深海生物を飼育している施設は、室戸市の協力により市の施設の一画を借りたもので、海洋深層水をかけ流しで使用しています。人間にたとえと温泉かけ流しみたいな環境かもしれません。深海生物を飼育しているほとんどの施設では、室戸のような冷たく綺麗な海水で飼育できる環境でないため、海水を循環させ冷やして飼育を行っています。

深海生物の飼育、研究には、室戸は恵まれた地域です。研究者と二年間実施した調査でも、新種の可能性のあるタコの仲間や世界で



筆者

二個体目のエビの仲間、和名のな深海生物などを含め高知県初記録の生物十種類を発見することができました。

室戸には子どもたちが大好きな深海生物がたくさん暮らしていることがわかってきました。なかでも各地の水族館でも大人気で、私の夢を多くの方に知っていたびっくりかけになったのがオオグソクムシです。等脚類のオオグソクムシは海のダンゴムシしんかいがこりようと言われている、佐喜浜町沖の深海籠漁で多く採集することができ、室戸市のふるさと納税の返礼品になっています。気になる味ですがエビやカニに近い味がします。オオグソクムシのふるさと納税返礼品などの全

国的にも珍しい私の取り組みが、様々なメディアの目に留まり、漁の様子や夢のストーリーをお話するなど、大好きな室戸を紹介させていただく機会が増えました。地域の子どもたちや海が大好きな子どもたちとの深海籠漁の体験漁や、教育現場を中心に深海生物などのタツチング移動水族館なども開催しています。

私は室戸の海と室戸の方々に夢をもらいました。今度は少しでも私の深海生物についての活動を通して、地元の子どもたちが将来大人になった時、室戸の深海は「凄いいんやで」と自慢できる一つの目玉にしていきたいと考えています。夢を未来の子どもたちに繋げていく。多くの方々に支えていただきながらこれからも私は走り続けていきます。

まつお たくや

一九九〇年 大阪市生まれ。
二〇一六年 室戸市に移住。

その線の動き、ほんのわずかな太さの違いで、世界が構築されているということの凄み。なんべん読んでも飽きることがない。線の一本一本が生きて動いているようで、怖いような、ため息しかでないような、なんとも不思議な体験だ。何度でも本をひらいて、その線を目で辿りたい。命を吹きこまれた線画が荒れ狂うのを、観測しつづけたい。そうってしまうのだ。

そしてもうひとつ、特筆するとしたら。
この絵本には、いっさい文章がない。

まったくことばのない、しんと静かな世界。なのに、どんなにことばを尽くした小説にも書けない、本にはおさまりきれないほどの、壮大な、壮————大な物語。
はてしなく広大な海に、いまにも波にのまれそうな、ぺらぺらの紙の舟。なぜ沈んでしまわない？ まずそこから物理に反しているのだけれど、説明などなく航海に乗りだした舟は、もっと奇妙な光景のなかを進んでゆく。文章がなくても、ページが変わるごとに展開していくドラマは、想像で補いながら追っていくことができる。巻末には小舟が旅した航路が示されているし、漫画のような風情もある。読み返すたびに新たな発見がある。舟の真下の途方もない世界、わたしたちの海にも広がっているかもしれない、誰も見たことのない世界を、なんらかの魔力で本に閉じこめてしまった、そんなふうにも思える。
そもそも、舟を折って海にうかべたふたり組は何者なのか。だれも乗っていない舟に、意思があるように思えるのはなぜなのか。さいごにたどりついた場所で、待っていたのは誰なのか。それはぜひ、あなたがめくる旅で、見届けてほしい。

わたしがこの絵本に出会ったのは、大好きな読書が思うようにできなくて、気持ちがあせっているときだった。

読書なんてほんとうはしてもしなくてもいいのだけれど、じぶんが読んで面白い本の情報を日々届けなければならぬ、という謎のプレッシャーにいつも責められていたようなわたしだった。(書店員はみんな、こうなわけではないです)。

読みたい本、読んでみてといわれている本がどんどん溜まっていくのに、時間がたりない、読んでもはかどらない。

文字を追う、ということに、すごく疲れていたんですね。

そういうときにツイッターで見たのが、この『旅する小舟』だった。

ページをひらいてみて、ほんとうに一瞬で、物語がわたしにおそいかかってきた、ような気がした。

ことばがなくても、ことばがないからこそ、引きずりこまれることもある。

そんな体験を、あなたにもしてもらえたら。



本に顔をうずめるあなたが見たい

山中 由貴

おりがみの舟が一艘ある。

「にもつぶね」と呼ばれる、三角にとんがった船倉がかわいいシンプルな舟だ。

じっさいに折ってみると手順はなかなか複雑で、こまかな調整をしなければ美しいフォルムにはならない。

その、ちいさく頼りなげな白い紙の舟がいま、奇妙ないきものがうごめく黒々した海の上に浮かび、物語が動きはじめるのを待っている。

あなたがページをめくり、壮大な旅をスタートさせるのを。

それは、『旅する小舟』という絵本だ。

作者はベーター・ヴァン・デン・エンデ、ベルギー生まれ。ネイチャーガイドとして働いていたこともある作家だ。もしいま、この絵本をじっさいに見てもらえたら、文字を費やさなくても、一発でそのとんでもなさが伝わるんだがな。あなたが本をひらいてみたくてたまらなくなるように、この本の魅力をここに書いてみますね。

といっても、ページをはじめから順番にめくっていかなくてもいい。なんせ、どのページで起こっていることも、ほとんどすべて同じだからだ。舟が海に浮かんでいる。それだけ。ただその舟のまわりを取り囲む景色が、ただごとではないのだ。

たとえば、水面すれすれまでぎゅうぎゅう詰めになって泳ぐ魚の群れ。色とりどりのサンゴ礁とふしぎな柄の魚たちは、すきまもないほどページを埋めつくし、目にうるさいくらいにぎやかだ。

ながい触角のりっぱなエビにたづなをつけ、乗りまわすカラフルなウミウシ、想像もつかない樹齢のおおきなマングローブに群がる真っ白いサギたち。タコとカニとクジラとチョウチンアンコウのハイブリッドのような巨大な生物が、提灯のかわりにぶら下げているのはなぜかブラウン管テレビで……。

紙の舟だけでなく、巻き貝の舟やレトロな潜水艦、要塞のような船までが行き来する、見る者のスケール感をこなごなにするような世界が、そこに広がっている。

夜の、圧倒的質量を持った波がしら、昼間の、どこまでも透きとおった水の色。

それらすべてが、「モノクロ」で描かれている。

そう、白と黒でここまで表現できるのか、とまずあなたはのけぞるほど驚くだろう。

そのあと、本にのめりこみそうな姿勢で、そのこまかな描写を目に焼きつけるだろう。

それらは、分解してしまえばただの線。

驚異的、とか、圧倒的、とか、どんなことばでも足りないくらいの、線。

いわゆる「線画」とよばれる画法で描かれた世界だ。

やまなか ゆき

1980年 高知生まれ

T S U T A Y A 中万々店の書店員

なかましんぶん編集長として Twitter やってます
好きな本について喋るときだけ饒舌になります

グラデーションの旅の途中

由井 恵

る人たちが沢山増えた。仲間に温かく見送ってもらいその職場を退職したが、私の中では「絵を描く」ことで体感した喜びを忘れられなかった。そんな中、ネットの検索エンジンでひっかかったのが、今描いている「チョークアート」だったので。

【心に寄り添うチョークアート】

自分の指とオイルパステルという画材を使ってグラデーションを生み出す「チョークアート」。このオーストラリア発祥のアートと出会い、三年。私はこのアートを通して、人々の心に「柔らかな世界」を提供したい。そう思う今の私があるのは、いくつかの転機によって変容が訪れたからである。

私は二十六歳まで、高知生まれ高知育ちの純高知県民だった。そんな私が、突如愛媛県に引越すという一大イベントを起こしたことから全ては始まった。理由は結婚。それまでずっと保育士として働いてきた私だが、何か別の職種で働いてみたいなと思い、愛媛の老舗飲食店で働き始めた。大好きな「美味しい料理」に囲まれて働けることはとても幸せだった。

働き始めて間もない頃、ホール

リーダーからあることを言われた。

「元保育士だから絵が描けるでしょ♪ メニュー黒板を担当してほしいな♪」と。この時はまだチョークアートの技法や存在すら知らなかった。私は美術専門の学校には通ったことがないし、内心ドキドキしていたが、初めて描いた黒板を見て、店長やスタッフは大喜びだったので安心した。大人になっても褒めてもらえるのは嬉しいなあ。と、気を良くしていた私だったが、その後プライベートで大事件が起こった。なんと離婚問題が勃発したのだ。これがとんでもないストレスの始まりだった。なんせ寝ても覚めても、ずっと私の思考につきまとうのだから。だが不思議なことに、メニュー黒板を描き変える時間、この間だけは苦悩がすっぽり頭から抜けていて、黒板上で自分を表現でき、没頭して

いた。

【やっぴん光】

辛い日々が続くそんな中、嬉しいことが起き始める。私の黒板を見て、お客様や他店舗のスタッフから、「誰が描いているのか?」といくつも声があがるようになった。そしてある日、接客時に私が描いていると知った一人のお客様から直接「あなたが描く黒板を楽しみにお店に来ています」と言ってもらったのだ。私が描いたもので喜んでくれる人たちがいるなんて、なんてありがたいことなんだろう。それはきらきらした光に包まれた感覚だった。

その後、離婚も無事(?)成立したが、私は高知に帰らず、しばらく飲食店で働き、黒板を描き続けた。この仕事が好きだったからだ。絵を通して私を知ってくれ

【チョークアートの魅力】

このアートはなんだろう。すごく立体感を感じる! 私もこれを描きたい! だけど、愛媛にはチョークアティストがいなかったの、私は県をまたいで体験に行った。実際に体験して、自分の指でグラデーションを生み出すことに楽しさと感動を覚え、即「プロコース」に通い出した。「うま



くいかない」と悩む壁も沢山あったが、それ以上に、チョークアートは私を魅了した。質感や奥行き、立体感の表し方。なにより数時間があつという間に感じるほど、彩ることが楽しかったのだ。

「仕事」に始めて

チョークアートを描きながら、私の中ではある思いが生まれていた。「これを仕事にしたい」。飲食店の時のように、自分が描いた絵でまた誰かが喜んでくれたら嬉しいと。ありがたいことにご縁があり、愛媛では三つのカフェで描かせて頂くことができた。その後、六年住み慣れた愛媛県から地元高知県に帰ることとなった。



高知に帰ってから現在まで、個人からの依頼だけでなく、市の運営する婚活イベントや県立牧野植物園など、施設や飲食店からも依頼を頂いてきた。人々にチョークアートの存在を知ってもらいたいことから、体験教室も定期的に開催した。体験教室といってもいちから描くのではなく、下書きを済ませた状態から自分の好きな色で「ぬる」内容だ。ぬり絵感覚だから「自分は絵が得意ではない」と感じている方もトライしやすいし、実際そう言う参加者も多くいた。それでもアートをしたいと思ってくれるのは、その方の内面から湧き出る想いがあるからなのではないかと思う。「できる・できない」のジャッジで決めるのではなく、自分が「やりたいか・やりたくないか」の欲求の声だ。私はデザイナーの見本は作るが、どの色でどうぬるかは自身で決めてもらうことを最初から大切にしている。それがひとつの自己表現になるからだ。参加者からは、「自分の好きな色でぬれるのが嬉しい」「没頭して時間があつという間だった」「頭のリフレッシュになった」など、嬉しい声を沢山頂いてきた。



「新しく出てきた想い」

私がなぜチョークアートが好きなのか、その根底の部分に気づいたのは二〇二〇年後半のことだ。それはふと頭に言葉として降りてきた。「べき・ねば」がないからだと。様々なルールがある世の中。信号、左側通行、勤務時間。それらがあるからこそ、生活や仕事有成り立つことは重々承知している。だが「自身の在り方」についてはどうだろうか。例えば、何か頼まれ事をされた時は、人に悪く思われないうちに私は必ず引き受け「ねば」ならない。こういう時はこういう風に「すべき」などに。など。私は無意識のうちに、自分という人間を「こうあるべき・

せねば」という枠にはめこんでいると意識したと同時に、チョークアートには「べき・ねば」がないことに気づいた。なぜなら現実がない世界を、好きな色で好きなように彩っていいのだから。そこには「のびのび自由に表現していい自分」しかないかった。だから私は好きなのだと気づくと、前よりもっとこのアートを人々に知ってもらいたくなった。絵が好きで、得意じゃないけど自分でも描いてみたい人。私のように「べき・ねば」で生きづらさを感じている人。楽しむことはもちろん、どこか日常に疲れている方にとつて、「自分でいられる」時間を提供したい。私が描いたボードを通して、「今、ここ」の自分が思うことに対して、じっくり感じる時間を過ごしてもらいたい。そんな想いを胸に、私は今日もチョークアートを描いている。

ゆい めぐみ

一九八七年 高知県高知市生まれ。Leo art Laboの屋号で、アートを心をつなげたいという想いを抱き、チョークアートを描いて活動している。

私の仕事 花火師

安岡 沙都

初めまして、小さな頃からの夢を叶えて花火師をしている安岡沙都と申します。

私が花火師になりたいと思ったのは小学六年生の頃、安芸市の花火大会を見た時の事です。毎年のように見ていた花火大会。花火はとても綺麗で凄く感動しました。

それと同時に周りの人たちの感動している姿、綺麗だねと笑顔で会話している姿を見て「こんなに人を感動させ思ひ出に残るような素晴らしい花火を作りたい!!」と思うようになりました。それから花火大会に行くと、上を見上げるより下を見る事の方が多くなりました。「花火はどんなふうにどん

な場所から打ち上げられているんだろ?」そんな事ばかりが気になりました。けれど、実際に調べたり行動に移すことはありませんでした。どことなく変に知識をつけるのが嫌だったからかな?と今では思ったりもします。

高校生になり部活よりはアルバイト! そんなふうに思えば毎日飲食店で働いていました。元々人と話す事、料理、お菓子作りが好きだったのでとても楽しく過ごしていました。そうしているうちに卒業後の進路を決めないといけない時期がやってきました。この日がくるまでお菓子作りに熱中していたので、花火師! っていうよう

りは調理師免許だったりお菓子作りの知識を身につけたいなと思い悩んでいました。すると、「お菓子作りはいくらでも好きなだけ趣味でできる。けど花火を作ることは趣味ではできませんがやない?」と母からの言葉がありました。なぜかこの言葉をすんなりと受け入れる事ができ、「私は花火師になる!」、

その思いが強くなり母の力を借りました。ここからが大変かな? と思っていたけれど、意外と単純で母の知り合いから知り合いへと巡り巡って高校の通学途中にある「高村火薬店」を知りました。学校終了後、突撃訪問しました! 高村さんは嫌がる事なく親身に

なって話を聞いてくれました。意外と知らない事実が! 四国では花火を打ち上げる業者はそれなりにあるが、製造から打ち上げまでを一貫している所は徳島県に三軒しかないと言うことです!! これを聞いた時はほんとうに驚きでした。

高村さんと繋がりのある「岸火工品製造所」を紹介してもらい、面接を兼ねて挨拶に行きました。温かく迎えてくれて晴れて四月から従業員の仲間入りをしました。花火屋に就職すると職人の技を学ぶのはまずは掃除からかな? と思ったりもしました。実際は、そうではなく一通り作業をさせてもらって自分に合う仕事を! みたいな感じで凄くワクワク仕事をしました。

花火作りの工程は『星掛け』『玉仕込み』『玉貼り』という大きく三つに分けられます。どの作業も丁寧に根気のいる作業です。

今は『玉仕込み』という作業を主にしています。この作業では玉皮に夜空で光、色を出してくれる星と呼ばれる火薬を詰めていき、

さらに割薬と呼ばれる星に火をつけ大きく飛ばす役割がある火薬を詰めていきます。そして二つを合わせて一つの火花の玉にするという作業です。なかなかこれが難しくて星を綺麗に並べて歯車のように一つに合わせるの是一年程かかって習得しました。ある程度の詰め方や詰めるものは決まっていますが、玉の通り仕込んでいくのですが、玉皮のなかでどうなっているのかどうという火花になるのかというのは実際に夜空に開くまでわかりません。手元での一ミリのズレが夜空では一メートルのズレと言われるほど丁寧さが求められる作業です。失敗する度に上手くなる。じゃないですけど一発一発を大切にしているのが研究を重ね、前回より丁寧な、この一発で見ている人を喜ばせるんだという気持ちでやっています。花火大会で自分の仕込んだ玉を上げて見ている人たちの「凄いいね、綺麗だね」「花火良かったよ」と聞けることが凄く私にとっての喜びです。これは今のコロナ禍の時代でより実感しました。

今までは見ている人たちの声を

聞くことができていたけれど、サプライズ花火だったり、公に発表しないで花火大会をする事が増えまして静かに静かに火花を上げに来て静かに帰るみたいに打ち上げていたので、近くで見ている人の声を聞くと改めてやりがいを感じます。あ、自分のやりたかった仕事は誰かを喜ばせ笑顔にする。今なら胸を張って言えます。自分にとって花火師は誇れる仕事です！



入社してから、数々の花火大会の構成を任されるようになり以前より気合いを入れて仕事をしています。構成を考えて自分の作った火花を打ち上げる。楽しいですよ！やっぱり、地元高知で打ち上げる火花はいつも以上に気合いが入り、前回よりいいものを頑張って作っています。他のところでも勿論気合いを入れて頑張っています！

自分の構成したなかでの一番に残る火花は徳島県阿南市で開催した音楽火花です。百分の一秒で音楽と火花をシンクロさせ全身で火花を楽しめるものです。この阿南市で開催した火花では自分の全てを出し切りました。実際火花を見るとここまできて凄いなとつい自分を褒めてあげたくなるような仕上がりでした。

火花は遠くから見ると、そう思っていたものが今では火花は下から見ると変わって、視界いっぱいになり火花が広がります。常に緊張感をもって安全におこなっています。

私が圧倒された火花は、『三陸の花火大会』です。こんな素晴らしい火花大会を遠くから見ただけでも凄いの、花火師目線で見させてもらって上には上がいる、素晴らしいと感じました。まだまだ知識、経験、沢山学ぶ事があり、もっともっと今より人を笑顔にさせられる火花を作る花火師を目指し頑張ります！



やすおか さとこ

一九九八年七月、高知県高知市生まれ

高知県立高知東工業高等学校卒業後 徳島県阿南市にある岸火工品製造所に就職 現在 五年目

かるぽーとマラソン部の足跡

濱口 拓也

「何かを始めるのに遅いことはない」。この言葉をよく耳にする。しかし現実的には、新しいことを始めるのはとても大きな壁があるように感じる。そんな新しい一歩を踏み出したいけど踏み出せないあなたを勇気づける物語を今日はお届けしよう。

二〇一九年五月、かるぽーとにマラソン部が設立された。もちろん立派な実業団チームでなく、私設ではあるが。通称、かるぽーとマラソン部（何の捻りもないそのままでの名前である）。メンバーは、二十代〜五十代の五人。目標は、高知龍馬マラソン二〇二〇完走。龍馬マラソン経験者は一人のみで、他の人は少し運動している人や一キロ走れることも自信のない人まで、能力差はバラバラ。ちなみに私は、筋トレが大好きでマラソンは昔から苦手である。ある日、仲のいい先輩にかかるぽーとマラソン部にハマー（私の愛称）入れたき。と急に言われた。

（ん？何度も言うようで申し訳ないが、私はマラソンが苦手であ

る）。マラソン部のメンバーに尋ねると「ハマーは若いから大丈夫」。入部してから現在も何か弱音を吐くたびにこの言葉を聞くことになる。つまり私は、『若さ』という一本の命綱を頼りに活動を続けているのである。

活動としては、個人の能力に合わせて練習メニューを考え、自主的にこなす。以上である。たまにみんなで走ったり、山登りをしてみたり、ご飯に行ったりもしている。最初のトレーニングの成果を実感したのは、二〇一九年十一月の早明浦ハーフマラソンである。ハーフマラソン後にひばり食堂でカツ丼を食べよう。というモチベーションのみで参加した。

緊張感と完走できるかの不安との闘いの連続である。結果としては全員完走した。衝撃的である。まさに継続は力なり。一キロで息切れをしていたところから始めたメンバーもいる中で、全員がハーフマラソンを完走したのは努力の賜物以外のなにものでもなかった。ここから少しずつマラソン部に入

ってよかったと思いはめることに。ちなみに私は、ハーフマラソンで両足がすり、靴擦れをし、途中で先輩が肩を組んで運んでくれた。私のこれを完走とっていいのかわは疑問だが、ゴールテープを切ったので完走ということでお許し願いたい。

ここから、龍馬マラソンまでの間、心が折れかけたり、怪我をするメンバーがいたり、険しい道のりではあったが龍馬マラソン当日を迎えた。龍馬マラソン当日は生憎の雨。早朝、メンバーのみんなが集まり、準備運動や他愛もない会話をしてリラックスをする。集場所には、大勢の人がいて圧倒された。私は、内心かなりビビっていた。正直に言って完走できる気がしなかった。

スタートの瞬間、鼓動が高鳴る。走り始めは呼吸の仕方すらわからなくなった。途中から慣れてきて、周りの景色が見えるようになった。仕事でお世話になった人、学生時代の同級生、どこかで見たことあるけど思い出せない人、全く知らない人。たくさんの方が応援してくれて、めちゃくちゃ楽しかった。たくさんさんの声援を受けながら走るのは気持ちよく、少し有名人になった気分である。

そして、たくさんさんのエイドメニューも楽しみの一つである。フルーツやドリנק、カツオ飯に味噌汁、すべてがいつも以上に美味しかった。また、エイド以外にも、沿道の方が差し入れをくれたりもした。

マラソン中、アメが欲しいと思いい、その差し入れに手を伸ばした。アメだと思いい手に取ったものは、まさかのチーズおかしだった。満面の笑みで感謝を告げる。カラカラに乾いた口にチーズおかしを入れて走ったのも大切な思い出である。そういったハプニングがありながらも、全員が完走。全員で何歳から始めても遅くないことを証明した。

もちろん今年の龍馬マラソン二〇二二も出場するので応援願いたい。

これからもかるぽーとマラソン部と私の挑戦は続いていく。この物語がみなさんの新たな一歩を踏み出すきっかけになれば幸いである。

はまぐち たくや

一九九四年 高知県生まれ。

高知市文化振興事業団職員

「アンテナ」 いきいきセカンド☆ライフ 講座



下尾 仁

周波数を合わせば、いろんな人と出会い繋がることができる。アンテナを高くて沢山のひとと繋がる。

二〇二一年八月、文化高知担当の濱口さんから電話がかかってきた。もう次の号の締め切りかなと電話をとると、文化振興事業団が「いきいきセカンド☆ライフ講座」という五十五才以上を対象にした教室を開いているのでぜひ、僕に講師をやってもらいたいという電話であった。僕が講師なんてと思い「本当に僕でいいか？」とたずねると濱口さんは「はい」と言い、同じやりとりを三回ぐらい繰り返して、電話では、なんなので後日詳しい話をしてもらう事になった。

次の日、濱口さんが僕の店に来てくれたので、しつこいようだが本当に僕でいいか？とたずねたら「はい、お願いします」と言ってくれた。それならば講座もまだ二カ月前の事、準備もゆつくりできると僕は、講師を引き受ける事にした。

そして講義時間はどのくらいですか？ とたずねると、「一時間半です」僕は思わず、

「ええー……長つがー……」

一時間半も一人で喋るが、と戸惑ってしまった。

人数はどのくらいいるんですかと聞くと、「約五十人ぐらいです」

「ええー……多ーつー……」

講師をやると引き受けたが、これは大変な事になったぞと思った。しかし僕のプロフィールにも書いてあるとおり、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。これが面白いことじゃなく何が面白いことじゃーと心の奥で小さな種火のような物が着いた。引き受けたからには時間は待ってくれない。とりあえず、濱口さんと講義のテーマを決める事に、あれこれ考え、決まったテーマは「おもしろいことはそこにある！」。日程は十月十三日、講師デビューへのカウントダウンだ。芝居やライブなど、

いろいろな舞台に立った事はあるが、一時間半も喋り続ける自信が無かったので二十分程のビデオを流す事を考えた。過去に僕が出場したキャラバンパンのビデオである。

これが自分で言うのもなんだが、なかなかウケのいいテッパンのビデオである。これを軸に話す内容を考える事にした。がしかし、それから心の種火は大きくならず燃りつづけあれよあれよと講義の日を迎えてしまった。

当日は少しコロナは収まっていたが、やはり影響もあり参加人数は三十数名、三名程の知り合いはいたが後は、全くの初対面、しかも五十五才以上の大先輩方。もうなるようになれと、僕が今まで経験した面白かった事や人の話を身振り手振りを交えながら全力で話した。すると意外に反応がいい、笑いも起きている、テッパンビデオもみんな笑ってくれている、僕はどんどん調子にのって話していると、残り時間五分ですと言われたので、質問タイムにすることにした。すると一人の男性が手を上げてくれ「大変面白い話でした、でもいきいきセカンドライフ講座という講座を聞きにきて、下尾さんの話をどのように参考にすればいいですか？」と質問された。確かに、参考にするような事は

無いかもしれない。しかし僕は、好きな事や興味のある時に自分ではできないとかじやなく一歩踏み出すきっかけにしてほしい。などとかっこつけて言ってしまった。でも本当は諸先輩方に僕みたいな若輩者がこうしたほうがいいのかは、まったくありません。ですよーね？先輩。

ただそこに、笑いが起こり拍手まであった、タイトルどおりの「おもしろいことはそこにある」であった。（自己満足）

なにぶん初めての経験でつまらないと思った受講者もいるでしょうが、一時間半も僕の話に付き合っていたとき、この場を借りて、本当にありがとうございます。感謝。



しもお ひとし

一九六九年生まれ。

岡豊高校一期生。二十五歳ぐらいに演劇に目覚め、日夜面白い事はないかとキョロキョロしている。

12～1月の事業から

tor mansion 「The SHOW」

二〇二一年十二月五日、かるぽーと小ホールにて世界各国で人気のtor mansionによる「The SHOW」を上演しました。

前日にはワークショップを実施し、「だるまさんがころんだ」で体を温め、全身を使って「バナナ」や「公園」を表現しグループごとに発表しました。親子での参加が多いなか、年齢差を感じない充実した一時間を過ごしました。開始時には保護者から離れられなかったお子さんが、いつの間にか参加者全員の先頭に立って楽しんでいた様子がとても印象に残っています。

公演は、新型コロナウイルスの影響も一時期ほどではなく、安心して鑑賞してもらおうことができました。観客の年齢層が違



ったためか、二回公演ならではの違いが明確に表れたように思います。親子の会話も少し聞こえた午前の回と、劇場公演ならではの少し引き締まった空気が流れるときもあった午後の回。出演者と客席が一体となって空間を作り上げていることをひしひしと感じました。



そのような違いがあっても、始まる前から観客を魅了し、楽しい時間を作り上げるtor mansionはさすがプロ！ コロナ禍でできないお客様のお見送りの代わりに、公演後には撮影タイムを設けるなど、演目外でも楽しい思い出になるような配慮が光っていました。

〈ワークショップ参加者 十名〉
〈入場者 のべ百四十五名〉

KEIRIN 競輪の補助事業

CO₂ 高感度密度計、空気清浄機、オンライン会議用パソコン（事業用）は感染症対策として、競輪の補助を受けて設置・導入いたしました。



CO₂ 高感度密度計



空気清浄機



オンライン会議用パソコン

高知市文化振興事業団

Nois mo / Nois m1「境界」

同時上演『夏の名残のバラ』

井関佐和子 芸術選奨文部科学大臣賞受賞記念

二〇二二年三月、高知市出身の舞踊家・

井関佐和子さんが芸術選奨文部科学大臣賞を受賞したというニュースが駆け巡った。井関さんは、Nois m Comp any N i g a t a (ノイズム・カンパニー・ニガタ) (通称・ノイズム) の、創設メンバーで副芸術監督を務めている。

その年の四月、井関さんの高知市長への表敬訪問をきっかけに、過去のノイズム公演で面識のあった高知県立美術館の藤田館長、浜口課長補佐が高知での凱旋公演を企画。お二人の協力のもと、文化庁のアートキャラバン事業での補助金を獲得できた。これを原資に、高知市文化振興事業団の主催事業として、かるぼーと大ホールでの公演が決定した。この補助金獲得がなければ、本事業が開催されることはなかった。

二〇二二年一月十日(月・祝)、かるぼーとで、「Nois m O / Nois m 1「境界」」同時上演『夏の名残のバラ』井関

佐和子 芸術選奨文部科学大臣賞受賞記念

「念」と題した舞踊公演を開催した。高知にある多くのバレエ団やダンス教室、地元企業の協力のおかげで、チケットは公演前日に完売した。チケットの販売枚数を客席の半分である五百枚に設定していたこともあり、完売後も数件の問い合わせがあった。会場に入れなかった方、申し訳ありませんでした。

ノイズムの舞踊は、いわゆるコンテンツポラリードダンスである。表現形態に形式を持たない自由な身体表現で、己の身体一つで観るものを魅了させる。時として、訳が分からない、意味が分からない、う見解も珍しくないため、日本において、その活動人口はそう多くはない。また、



日頃舞踊に親しみがなければ受け止め方も分らないため、自然と劇場へと向かう足は遠のく。そんな中、今回の公演では、約五百名の方々がその身体表現を一目観ようと会場へと足を運んだ。ノイズムへの、強いては井関さんへの期待の表れであったと思う。

今回上演した『夏の名残のバラ』や『Near Far Here』は、共にノイズムの芸術監督である金森穰さんによる演出・振付作品である。両作品とも映像を駆使し、観る者が視覚的に楽しめる工夫がされていた。映像を映すスクリーンが舞台に対して斜めに配置されていたり、今その瞬間の動きを違う角度から撮影したものをスクリーンに映したり、かなり凝った演出をされていた。日本を代表するコンテンツポラリードダンサーとしての妙をいかに発揮されていたように思う。そして、それらに応えようと毎日二十時まで必死に汗をかいていた技術スタッフが多くいたことも書き添えておきたい。舞台に立った者だけではなく、舞台を支えた多くの人が関わり、盛大に幕を閉じた本公演、ここに「境界」はないと信じている。

〈入場者数 合計四百七十三名〉



高知を撮る

第37回写真コンテスト入賞作品

ノスタルジア信号場

(令和3年1月7日 八代通電停)

高橋 駿介

全国でも僅かしかないタブレットの交換を間近で見られる場所。同時に、何か懐かしさも覚えるまさにノスタルジアな場所です。

「これまでお世話になった人を集めて感謝の集いをやりたいの」と知人の高齢女性から、パーティーの演出を依頼された。気の置けない仲間を招いておしゃべりをするのは楽しいだろうと、演出を引き受けることにした。その後数回の打ち合わせの途中で突然、こんなことを言われた。「素敵なお厨子が見つかったの」。

厨子？ 歴史の教科書で、玉虫の厨子というのはあったが、それは魂を祭る……と頭の中を疑問符がグルグル回っているところへ、

「実は、生前葬をやるうと思ってる」。これまでもいろいろと式典やイベントに関わってきたが、生前葬は初めて。こうして前代未聞の生前葬の演出に携わることになった。

出席者には、最後まで生前葬であることを明かさず、食事はたつぷり時間をとり、出し物はなし。講話は、主治医、神主。最後に、厨子が登場、次第はざっくり言えばこんな感じだ。

パーティーの出席者は、主催の女性の同級生やお世話になった人たちだったため総じてかなりのご高齢。一点ものの訪問着や上品なドレスを

生前葬



風俗歳時記

纏い、会場は華やかな雰囲気。講話の後、ご馳走を食べ、いよいよ生前葬の種明かし。照明を落とし、静かな音楽が流れる中、正面にあった布が剥がされると、厨子が出現した。一瞬戸惑いはあったが、住職が人間界に生まれる意味と生前葬について語った言葉は、一人ひとりの心に染みわたった。厨子にはすでに戒名が彫られた位牌も納めていたが、ご本人が元気に横に立っているのが、会場は最後まで和やかだった。

「死んでから親しい人に来てもらっても会えないから。やっぱり元気なうちに、皆さんに御礼を言って、美味しいものを食べて。死んだら私はここに入るということを知っていただけだから嬉しいじゃない？」と言いつ放った女性。この生前葬がきっかけで、さらに多くの人のご縁が深まり、何かとお誘いが増えたのだとか。生前葬を終えた今も、快活に生きている女性の姿を見て、「生前葬、やってみようかな」と思っただけではないようだ。

(立花香)



世界三大ピアノブランドの一つ、スタインウェイ&サンズを、反響板を設置したかるぽーとの大ホールで、ひとりじめしませんか？

- 【参加対象者】ピアノを使用して練習や録画等を行う個人やグループ
 【会場】高知市文化プラザかるぽーと大ホール
 【定員】11 組 【参加費】無料
 【申込】2022 年 2 月 28 日（月）までにメールにて申し込み。調整及び抽選の上、3 月初旬に結果通知。
 <申し込み時の記載事項>
 代表者の①氏名（よみ）②年齢 ③郵便番号 ④住所 ⑤電話番号
 ⑥希望の時間帯（第 2 希望まで）⑦意気込み ⑧メンバー編成や内容
 <申し込み先>
 高知市文化振興事業団 oubo@kfca.jp 詳しくは⇒
 【お問い合わせ】
 高知市文化振興事業団 ☎088-883-5071



©原ゆたか/ボプラ社

ミュージカル 「かいけつゾロリ まほうつかいのでし」

子ども達に人気の「かいけつゾロリ」が楽しいミュージカルになりました♪
 本とは違った楽しさで、帰る時にちょっと元気になれるお話です。

【日 時】
 2 月 11 日（金・祝）
 開場 13:30 開演 14:00 終演 15:30（予定）
 【会 場】
 高知市文化プラザかるぽーと大ホール
 【入場料】
 全席自由（3 歳より有料）
 一 般 前売り 3,300 円/当日 3,500 円
 中高生 前売り 300 円/当日 500 円
 小学生以下 前売り 100 円/当日 300 円
 ※0 歳～2 歳膝上無料
 【お問い合わせ】
 公益財団法人高知市文化振興事業団
 TEL：088-883-5071
<http://www.kfca.jp/kikaku/>

風 伯

県史編さん

五十音順の受付に並ぶが、招待者専用らしく、「一般の方はあっち」といわれ、端っこ一般受付へ。招待もされていないのに押しかけたのは、高い志から。けっしてヒマだからではない。スマホでの前夜の登録にもかかわらず、ちゃんと名簿に私の名があった。「一般は二階へ」というので、八〇キ

令和三年勤労感謝の日、「とでん」に乗る。無賃乗車だった。向かったのは県民文化ホールオレンジ。「高知県政一五〇年記念式典&高知県史編さん開始記念シンポジウム」。

複数の演者が来高。土佐の馬の歴史文化研究家を自称する私のお目当ては、馬の博物館学芸員の講演。高知に、かの博物館からオンラインティが来るなんて、こんな幸運な偶然はない。

今回、馬博の紹介とともに、編さん後の史料散逸防止や学校の史料保存の重要性など大切なお話を聞く。

終了後、感激した私は許可をもらい、スタッフに連れられ控室までおじゃまし、ご挨拶。恐悦至極。若い本県出身の研究者、すばらしい。

私と同じ時計台の高校卒とも聞き、また感激。関係者の皆様、最高のイベントをありがとうございました。

追記、本欄初寄稿。高知文学第四十七号に書いた駄文「チキン」(これを恥ずかしすぎるので読まないでね)を読まれた担当氏からの依頼。筆名「昌」は、以前高知新聞コラム「閑人調」で使ったもの。タタのヒマ人ですが、お付き合ひ願います。

今号の表紙

「木蓮」

高田 琴音

会いたい人にも会えない日々の中で、毎日たくさんの情報が飛び交い、頭も心もいっぱいになります。わたしが大事にしたいと思っていることは、心に余白を持つことです。

寒い朝に少し早起きして飲むコーヒーや、小さな蕾がいつの間にか花を咲かせているのを見ていると、また明日からも頑張ろうと思えます。

白木蓮のふわりとした花のような小さな余白を心に置いて、春の訪れを待ちたいです。

(たかた ことね/
 国際デザイン・ビューティカレッジ1年生)



特別落語会!!

休館前の

人気番組で薄紫の着物を着て腹黒ネタで人気の三遊亭円楽。

俳優として数々の舞台やドラマで活躍している風間杜夫。

年間600ほどの高座をこなし、寄席やホール落語会で人気沸騰中の桃月庵白酒。

芸風の異なる3人の噺家による高知だけの特別な落語会。

さあ皆さん、休館前のかるぽーとで笑い納めを!

第1弾

かるぽーと休館前の4週連続企画

2022年 3月6日(日)

高知市文化プラザかるぽーと
【大ホール】 開場 13:30 開演 14:00

【来場の皆様へお願い】

新型コロナウイルス感染予防策として、本公演来場時は、マスクの着用、入口での手指の消毒、非接触式体温計による検温、連絡先の提供等にご協力いただきますようお願い申し上げます。

入場料

全席指定

前売り / 1・2階席 4,000円 3階席 3,000円
当日 / 1・2階席 4,500円 3階席 3,500円

※未就学児の入場はご遠慮ください

お問い合わせ

公益財団法人高知市文化振興事業団
TEL:088-883-5071
<http://www.kfca.jp/kikaku>